

SEISHIN APPLICATION *CLICK*

—— 適応と前進 ——

Index	P1~P4	【特集】『未来を創る』に見る印刷技術トレンドの展望	公益社団法人 日本印刷技術協会 専務理事 郡司秀明
	P5~P6	【情報産業】関連情報	
	P7~P8	【経済】関連情報	
	P9~P10	【コラム】「ビジネスに重要なポイントはヨットから学んだ」	株式会社 フラジュテリー 代表取締役 橘田佳音利
	P11~P12	【くらし】関連情報	

10月11日には富士山の初冠雪が報じられ、いよいよ秋深くなり冬間近となりました。
一方ラグビー日本代表はワールドカップ(W杯)イングランド大会での戦いを正しく善戦され、ここまで行くと思っ
た人は少なかったことでしょう。優勝候補の南アフリカからの金星は停滞した我国の雰囲気をも払拭しました。
印刷産業は日印産連設立30周年記念式典、全印工連60周年記念行事と続き、業界はしばらくぶりに華やい
だ雰囲気につつまれ、多くの功労者を称えられました。
景況は10月の月例報告が発表され相変わらずの状況、しばらく個々の努力を待つ年末になりそうです。

今号では、特集に「未来を創る」に見る
印刷技術トレンドの展望と題して、公益
社団法人日本印刷技術協会専務理事
の郡司秀明様に、コラムは、株式会社フ
ラジュテリーの橘田佳音利様にご執筆
頂きました。ご高覧ください。
また、CLICK合本の印刷図書館への寄
贈記事を折り込みにてお届け致します。



(編集部)

自国開催となる19年大会に夢をつないだラグビー日本代表=ロイター
(日本経済新聞 2015年10月15日)

誠伸商事株式会社

TOKYO	03-5751-3011
SIZUOKA	054-340-1191
TOUHOKU	022-299-6661
KITAKANTOU	028-684-1981
NIIGATA	025-286-9040

コラム

ビジネスに重要なポイントはヨットから学んだ

株式会社 フラジュテリー

代表取締役 橋田 佳音利

私の趣味はヨット。43年間乗り続けてきた。そのヨットからビジネスの重要ポイントが学べるとは思わなかった。

■ 東京生まれの東京田舎育ち ■

私が生まれ育ったのは、東京杉並区。現在も杉並に住んでいる。東京23区内ではあるけれど、緑が多く未だに自然が残る。近所の畑では、朝採れ野菜の無人売り場がいくつも存在する。一袋100円。子供だった当時は相当な田舎だった。田んぼや畑が、住宅とともに混在しており、遊ぶのには格好の場所だらけだった。

子供のころからおてんばだったわたしは、近所の畑で蝶を追いかけて、セミを捕まえる。オタマジャクシになる前の蛙の卵を触るのが気持ち良くて、家に持ち帰っては、蛙になるまで育てた。材木を使ってスズメもつかまえる仕掛けを、近所の材木屋さんのおじさんが教えてくれた。蝶にいたっては、素手で捕まえることを楽しみの一つとしていた。素手ではたいて気絶させ地面に落ちたところを、そっと傷つけないように、捕まえる。

これが一番蝶を傷めずに捕まえられる方法だった。網で捕まえると羽がぼろぼろになったが、この手法であれば昆虫採集にも適する。その近所の材木屋さんに立てかけたあるたくさんの材木に登っては遊んでいた。今では考えられないことかもしれないが、特にそれで叱られた覚えはない。

家の裏には幅1.5メートルほどのどぶ川があった。そこにかかっている幅10センチほどの、コンクリートで出来た梁が1メートル間隔で渡してあり、それを1本ずつ向こうに渡り、次の梁を渡って帰ってまた次へ、と。たくさんの梁をより早く渡り、タイムをあげるため渡る練習(?)したのを思い出す。渡り損ねて、コンクリート梁をまたぐ感じでズズズと落ちたことがある。足の内側を太ももから足首まで血だらけになった。今でも肉体的に強いのはこの頃からの訓練の賜物かも。。

昔のことをこのように書いていて、本当におてんばだったのだと思う。とても楽しかった。

■ 私は物心ついたころには海が好きだった ■

そんなおてんばな私は、物心ついたときには海が大好きだった。なぜ海が好きになったのかは自分でもわからない。祖母が館山に住んでおり、その祖母のところに遊びに行っているうちに海に魅せられたのだ。

小学校1年生、夏休みが終わり新学期でのこと、担任の先生の提案で、くろんぼ大会をすることになった。誰が一番日焼

けをしているか。結果私が優勝者。そんな名誉なことであるはずが無いのに、嬉しかった。決して私は地黒ではなかったが、そのぐらい海に行っていたのだろう。

小学校3年生の頃から館山に長くいたいと両親にせがみ1人で館山に行かせてもらうようになる。内房線に乗って行く初めの一人旅、あのドキドキ感は、今でも映像に浮かんでくる。一人旅といっても、両国の駅まで母と一緒に行き電車に乗せてもらう。何号車の何番の席に乗ったということ、館山の駅に迎えに来てくれる祖母に電話で伝え、祖母がその窓の前まで来て待っていてくれる。という1人旅だ。それでもその間の2時間位の間の、ワクワク、ドキドキ、ハラハラはとてつもないものだった。その席から微動だにせず外を眺めていたような記憶がある。祖母には色々なことを教わった。折り紙の折り方も、お手玉の遊び方も、編み物の編み方も、長い髪の毛の結い方も、そして着物の着方もすべて祖母から学んだ。色々なことを教えてくれる祖母は、わたしが海へ行くのを毎日のように付き合ってくれた。

そのうち、館山の海の沖に浮かんでいる「白いもの」に憧れるようになった。その「白いもの」はヨットの帆であった。ついに5年生になったとき、父にヨットに乗りたいと頼んだものの、いつものように頭ごなしに却下。しかしそれを続けること5年。大好きな祖母が取り持ってくれ、ある大学のヨット部が開催する夏休みのヨットスクールに参加できることになった。中学3年生、願いがかなったときだ。

そんな私は体育大学に進みたいと思うようになっていた。しかし音楽もずっと勉強しており、歌を歌うことも好きだった。結局音楽好きの父に体育大学は反対され音楽大学に進むことになる。現在わたしの趣味はヨットと歌を歌うことだ。

■ ヨットに魅せられ43年 ■

中学3年生の夏休みにヨットスクールに参加してから、かれこれ43年間、ヨットライフを謳歌している。ディンギー（動力を持たない小さなヨット）からクルーザーまで、レースからクルージングまで両方の楽しみ方をしている。海に出るとき、船に乗るとき、心のリフレッシュは最たるものだ。

大学時代にはレーザー級という一人乗りのヨットで、全日本選手権レディーズ部門で優勝、世界選手権の切符を手に入れた。私の目標は「世界選手権に出場すること」だった。このレースに勝つためにどれだけ練習したことか。レーザー級は

80キロ位がベスト体重と言われている。無論男性を想定してのことだろう。しかし私の敵は女性だ。諦めることは無い。ヒール(ヨットが傾いた状態)を起こすためにも体重とそして身長が必要だ。(風を多く受けながらも平らにして走らせたほうが早く走る。)45キロしかない私は女子の中でも身長も低い。レースに勝つために3か月ほどで10キロ太らせた。食べりゃあ良いのだ。更に4キロのタンクをしょって乗った。あわせて14キロプラスの体を支えるため、毎日10キロ走り、100回腕立て、100回腹筋、体も鍛えた。年間100日ほどは海に出ただろう。敵はトップセイラーの彼女、とにかく彼女に勝たなければならなかった。その敵は、後の日本初の女性オリンピックセイラー、ソウルオリンピック470級に参戦した野上敬子選手だ。

■ ヨットで学んだビジネスの基本 ■

それらのヨット経験から多くの学びがあることに気づいたのは、なんと起業してからだった。20年以上後のこと。

ヨットそのもので、人生の学びや、ビジネスにおける学びがあるとは思わなかった。当時はただやりたかったただけだから。

ヨットはマイナーなスポーツ、勝っても賞金があるわけでもなく、トロフィーだって持ち回りの場合もあり、翌年レプリカになったりしてしまう。私が好きだっただけで、たとえ全日本レディースで優勝したといっても、たいしたことでも無いと思っていた。しかしどんな小さなことでも、困難をも越えて成就させた、という行為は自分自身で認めてやるべきだ。と初めて気づいたのは起業後だった。自分自身を認識し、認めると、これがモチベーションアップに繋がった。始めてヨットでの優勝を、自分自身で認めたときの心の中のモチベーションの高まりは、今でも心地よく心によみがえる。

私がヨットで学んだビジネスの3つの基本、これは大きく飛躍に繋がった。

1つ目 思えばかなう。やり続ければかなう。自分の状態がたとえどうであろうと努力すればかなうのである。

あの時、身長も体重も全く及ばず、それでも鍛えて強風で走ることが出来た。無理かもしれない、と思うことが全く無かったから。よりよくするためには、何をもうとわなかった。無論練習量はすごかった。(おかげで大学卒業時は出席日数がぎりぎりだったが。)体を鍛えることもおこたらなかった。チビだから強風では乗れない、などとも思わなかった。体重が少なければ、その分、体重があまり影響しないフリー(風下に向かって走ること)でかっとなればいい!と思っていた。それは乗りこなしてできるから。思えばかなえることができるのだ。

2つ目 そしてデンマークで行われた、ウィメンズワールドチャンピオンシップに参戦した。この時学んだこと。それは「目標は高く、遠くに持つ」ということ。

「世界選手権に出ること」が目標となっていた私、世界選手権では最悪だった。「最悪」というのは、今の若い子たちが言う「最悪〜!」というものとは違い、本当に最悪なのだ。「最悪」とはただ一つ、、、世界選手権に「出る」ことが目標では駄目だったのだ。せめて世界選手権でシングル(1-9位をいう)をとってくる、という目標にすべきだった。言葉も伝わらなかつ

たのでモチベーションも下がりっぱなしで、気力や気合をほとんどなくしていた。もしあの時もっと高い目標を持って望んでいたら語学が出来ないことで疲弊することもなかっただろう。目標は高く、そして遠くに持つ。

3つ目 そしてその後クルーザーレースにも参戦するようになる。クルーザーは1つの船を動かすことを皆です。一つのポジションが欠けても早くは走れない。たとえば方向転換、舵を切る人、セールの方向転換をする人、体重移動する人、などそれらのどれが不足しても早く進まないのだ。レースに勝てない。協働作業の重要性を学んだ。チームビルディングだ。協力して作業すること。それが上手にかみ合ったとき艇は最速の走りをする。ビジネスでも皆で協力し創り上げる協働作業が、よりよいものを生むのだ。

この3つのビジネスの基本を私はヨットで学んだ。

■ 煌く自分創り ■

たかがヨット。しかし何か目標を達成させるには、スポーツもビジネスも一緒。ずいぶん気づくのが遅かったが、私が起業した12年前、この3つの気づきを得たことで、ただのヨットが大きなビジネスの支えに変わっていったのだ。

弊社は、女性が企業内で活躍するための支援をしている。女性の活用は企業の売り上げ実績に直結するからだ。12年前ミドルエイジ女性など要らない!と言っていた社会があった。社会が、ほとんどの企業が、人が、振り向かなかった。今ここへきてもっとも注目を浴びているのが女性活用である。

3つのビジネスの基本、これは彼女達のモチベーションアップのためにも役立っている。

弊社のコンセプトは「内面から外面から煌く自分創り」である。煌いていれば仕事も人生も成功する。いつもでも内面から外面から煌めき続けるために、また女性が活躍し続けるために、これからもこのポイント認識していきたい。

■プロフィール

橋田 佳音利(きつだ かおり)

株式会社フラジュテリー代表取締役
マチュアバイザー
笑顔のハンサムウーマンカウンセラー

自らが受けた男女差別・母子家庭差別・年齢差別により、同じように悩む女性の支援こそ使命であると強く認識し、ミドルエイジに特化した女性活躍支援の企業として、株式会社フラジュテリーを2003年に設立。

唯一パイオニアである。外面から内面からの煌く自分創り、ミドルエイジ女性の転職・再就職の支援、企業内中堅女性社員のモチベーションアップを図るなど、ミドルエイジ女性の活躍支援に力を注ぐ。

■主な著書

「煌めくミドルと諦めミドル」(長崎出版)

■会社概要

称号:株式会社Frajouterie(フラジュテリー)

設立: 2003年3月

代表者:代表取締役 橋田 佳音利

事業内容

- ・ミドルエイジ女性活躍支援・ダイバーシティコンサルティング
- ・ポジティブアクションコンサルティング・人材のトータルサポート
- ・雇用コンサルティング・復職支援
- ・モチベーションアップ・キープ研修・カウンセリングとフォロー
- ・URL <http://motivation.frajouterie.com/>